
家族ゲーム 番外編

祐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族ゲーム 番外編

【Nコード】

N6619P

【作者名】

祐月

【あらすじ】

連載中のシリーズ、家族ゲームの番外編です。

季節ごとの家族の日常を書けたらと思っています。

A Day Before Christmas Eve (前書き)

まずはクリスマス話。

家族の日常ですが、楽しんで頂けると嬉しいです。

A Day Before Christmas Eve

新堂家のポーチにはトナカイとサンタのイルミネーションが、リビングには大きなクリスマスツリーが1飾られていた。

そして家の中では明日のパーティーに備え、家族それぞれが思いの準備をしていた。

玲がローストチキン用の鶏の下処理をし、その横で一馬と希がパイ生地を練り、翼と潤はセナに今年最後のシャンプーを施している。

リビングのツリーの前では、悠と慎と渉が届いたばかりの奈緒からの小包をクリスマスプレゼントにしては小さいと思いつながら開けていた。

「くつしただ〜」

渉の弾んだ声に、キッチンで並んで料理をしている3人がリビングをのぞきこむ。

渉が手にしているのは、自分と同じくらいの大きさの靴下で、色違いの靴下を悠と慎が手にしている。

「人数分あるみたいだぞ。」

「ぼく、いちばんおっきいの!」

さっそく渉がどれがいいか選ばうと、悠と慎の手の中にあるそれぞれの靴下を並べ始める。

「奈緒さんからカードが入っている。全員分あるから好きなものを選ぶように。あとはいつも通りだそうだ。」

子ども達と離れて暮らす様になってから毎年、新堂家の両親はクリスマスとそれぞれの誕生日にはプレゼントを欠かさなかった。そ

れは、たとえ一緒に過ごしていなくても、毎年遅れることなく子ども達の手元に届いた。

今年はいつものプレゼントに加え、物心ついた涉と、家族になって初めてのクリスマスを過ごす希のために、プレゼントを入れる特大靴下を編んだようだ。

「全員分なんてしなくていいのに・・・」

もう子どもじゃないんだから・・・」

慎はぶつぶつと言いながらも、嬉しそうに涉と一緒に靴下を選びを始めた。

悠はそんな2人に微笑みながら、キッチンからのぞいている3人に手を休めて、靴下を選んでしまう様に言う。

そこへ、シャンプーを終えたセナが走り込んで来た。

「セナ、待て！」

まだ完全に拭ききっていないんだぞ！」

セナはまっすぐに悠が準備しておいた、セナ用ラグに倒れ込み体をこすりつけ自ら体を拭いている。

その後ろから、濡れそぼった翼と潤が情けない顔で現れた。

どうやら、風呂場でさんざんセナに暴れられ濡れてしまったようだ。

「こんな大変だと思わなかった・・・」

疲れきった顔で言う翼に、潤も頷く。

「いや、セナはいつもおとなしくしているから、お前達が格下にみられているんだらう？」

悠の発言に、一馬と玲も頷き、涉もよくわからないながら父親達の真似をしてうんうんと頷くと、セナも肯定する様に一声鳴いた。

「それはないだろ」
という翼の大きな不満の声にリビングに集まった家族全員が明るい
笑い声をあげた。

そんな祝日の平和な昼下がりに。

A Day Before Christmas Eve (後書き)

3日連続更新します！

まだ明日の分書いていないので不安ですが・・・

**A
D
a
Y
B
e
f
o
r
e
C
h
r
i
s
t
M
a
s
E
v
e
2
(前書き)**

連続投稿です。

A Day Before Christmas Eve 2

そんな祝日の夜、季節外れの嵐は現れた。

「メリークリスマス！」

夕食も終わり、全員がソファに座りくつろいでいるリビングの扉が勢いよく開いた。

「……………奈緒さん（なおちゃん）！！！！！！」

「まだクリスマスには早い！」

いくつもの驚きの声が重なり、最後に一人、翼がツツコミを入れる。

奈緒は子供達の驚きをもともせず、一番端に座っている翼に抱きついた。そしてそのまま隣に移動し、玲、慎の順に抱きつく。

「奈緒さん酒臭い！」

翼の叫びに同調するように、玲と慎がそれぞれ顔をしかめる。

一番自分に似ている息子の声など気にせず、奈緒は次のターゲットへと移動する。

「悠さーん、希もメリークリスマス！」

微妙に舌の回らない様子でぐずぐずと悠とその膝に乗っている希に抱きつく。

「奈緒さん、どうなさったんですか？」

いらっしゃるのは明日だと昼間届いた荷物に入っていた手紙には

ありましたが。」

2人分の体重を受け止めながら、悠はにこやかに微笑んだまま義母に尋ねる。

「悠さんは本当に豊さんにそっくりよね。」

玲も慎もそっくりだし、ホントあの人のDNAって・・・

私の方は翼と希にしか受け継がれないなんてっ」

酔っぱいの思考は読めず、ぐずぐずと悠に抱きついたまま、よく分からないことを嘆く奈緒を引きはがすのを諦めた悠は、とまどう希も含め2人を抱きしめながら、この状態ではもうすぐ現れるであろうもう1人を思い浮かべる。

「父さんと何かありましたね？」

静かに告げられた言葉に、奈緒は顔を上げると口をとがらせる。

その表情は自分より大きく育った息子がいるとは思えないほど若々しく、いつも通りだった。

「悠さんも豊さんと同じ、何でもわかってしまっておもしろくないわ。」

やはり酔っぱいらしく、よく分からないことをつぶやくと、これまでクダを巻いていたのが嘘のようにすっかりとした足取りで「今夜は泊まる」と言っけてリビングを後にする。

ポカンとしているのは希だけで、残りのものは深いため息を一つだけついた。

そんな中、沈黙を破るようにチャイムが鳴った。

誰が鳴らしたのか予想のついている男達の中から、悠が立ち上がりリビングを後にする。

希が状況をつかめず、きよるきよると皆の顔を見回していると、出て行った悠が豊を連れ戻ってきた。

「ジジ！」

渉が呼びかけるが、すぐに周りの重苦しい空気に口をつぐむ。

悠の目配せをつけて、潤が渉にもう寝る時間だからと促す。

不穏な空気を感じたのか、渉は「おやすみ」とだけ言って、潤に抱えられ部屋を後にした。

渉に手を振って応えた豊が、ソファの空いているところに座ろうとすると、それに悠が冷たい視線を向ける。

その視線のあまりの強さにソファ前のラグに思わず正座をした父親に、子供達は冷たい視線を向ける。

「父さん、今度は何をしたんですか？」

高圧的に事の次第を問いたただす息子達と、それに押される父親の親子の会話は夜遅くまで続いた。

A
D
a
Y
B
e
f
o
r
e
C
h
r
i
s
t
M
a
s
E
V
e
2
(後書き)

事件勃発。

C h r i s t m a s E v e (前書き)

イブの朝のお話です。

Christmas Eve

昨夜、息子達に一方的につるし上げをくった豊は、その後、奈緒の閉じこもった希の部屋の前で声をかけ平謝りしていたが、もちろん酔っていた奈緒が応えることは無く、冷たい眼差しで通り過ぎ各自の部屋に入る息子達。

仕方なく客間で寝ると、一応、悠に告げ部屋に引き上げようとする、客間は篤志が使っていると悠に言われ、いくらセントラルヒーティングが効いているとはいえ、真冬にリビングで寝ては風邪をひくと息子達の心情に訴える。

最初は反省を促すためにも部屋にいれないつもりだったが、新堂家の居候だという認識のある一馬が自分のベッドを譲ると言うので仕方なく、悠は希の次に小さい翼に父親にベッドを貸してやるようにと告げる。

「奈緒さんが希の部屋とつちやったから、今夜は希と一緒に寝ようと思ってたのに・・・」

ぶつぶつと不満を口にしながらも、母に閉め出されている父親をかわいそうに思うところはあるのか、素直に自分の部屋を明け渡そうとする翼に何を勘違いしたのか、父は余計なことを言う。

「じゃあ翼、久しぶりに父さんと寝よう?」

「誰がこの年で父さんとなんか寝るかよ!」
間髪入れず悪態をついた翼は、一馬の腕を掴むと引っぱり走り出す。

ばたばたと翼に腕を引かれた一馬が自室に消えるのを見送った悠は、顔色を変えることなく、形ばかりの就寝の挨拶をすると希を連れて自室に入った。

犬も食わないもののために嵐のようにやって来た両親を迷惑に思
いながら、それを全く無視して普段通りに子供達は朝を迎えた。

朝食をとり、いつも通りに支度を整えた悠は、渋る父親を引きず
り仕事に向かい、残った子供達は朝食後のひとときを思い思いに過
ごしていた。

「おはよう、皆。」

何事も無かったかのようにリビングに現れた奈緒は、遅れて食事
をとっている翼の隣に座ると、朝食をとり始める。

「昨日の夜はごめんなさいね。」

あなたの部屋をとってしまっ……
希に向かつてすまなそうに謝る奈緒に、希は首を振る。

「大丈夫だよ。父さんよりは迷惑かけてないから。」

父さんは俺の部屋を取ったんだよ。しかも、一緒に寝ようだって、
俺の記憶にある限り父さんと一緒に寝たことなんてないし、今更だ
よ。」

まだ、昨夜の父の言動を根に持っているらしい翼はぶつぶつ言う。
男ばかりで生活している期間が長い子供達は、完全なるフェミニス
トとなっている。そこに重大な影響を与えているのは家長の悠で、
悠が家を出ることになった原因は父親、母が怒っているならば何事
も全面的に父が悪いと思っている。

「そうね。あなたにも迷惑をかけたわね。」

そっだ、お詫びに買い物に行きましよう？もちろん皆で。

プレゼントはもう買ってあるけど、もういくつか増えても良いで
しょう。」

思いがけない奈緒の提案に、渉は無邪気にはしゃぎ、慎も目を輝

かせる。玲はため息をつくが内心は、昨夜、かわいい弟が自分のところではなく、一馬のベッドに潜り込む原因を作った父親への報復を考えている。

割れ関せずと、新聞を読んでいる一馬に奈緒は、もちろん一馬と潤も家族なのだから一緒にと弾んだ声で告げる奈緒に、潤は素直に従い準備をすると言って足取り軽くリビングを後にする。

それぞれが準備をする中、年長の一馬と玲だけはため息とともに、今日は大変な一日になりそうだと思った。

C h r i s t m a s E v e (後書き)

まだ続きます。

Christmas Eve 2

朝の奈緒の発言以後、デパートの特別室で着せ替え人形になったり、クリスマスプレゼントと称して、服、靴、バッグにアクセサリーなどとにかく大量の買い物をし、それぞれに他の家族へのプレゼントを買い足すなど忙しい一日だった。

昼間はまだまだ買い物するつもりだった奈緒に、ホームパーティー用の料理を作る時間が無くなると言いくるめ早めに帰宅し、今は奈緒と玲が料理の仕上げをし、希は翼、渉と一緒にパイとクリームとフルーツを重ねたミルフィーユを仕上げ、テーブルに運ぶ。

すでに着替えをすませた潤と慎はテーブルセッティングをし、一馬と篤史はちょうど着替えて着たところのようだ。

「兄さんが帰って来る前に急いで着替えておいで。」

一馬に声をかけられて入れ替わるように、それぞれ着替えをすませていない者は自室へと向かう。

少しして玄関のチャイムが鳴り、悠の帰宅を告げる。

2階からばたばたと降りて来る足音がして、希が勢いよくドアを開け、包みを手にした悠に飛びつく。

その後ろにはもちろん豊がいるが、出迎えに来た面々は悠の手にある包みに釘付けで、父親に注意を払う者はいない。

その扱いに、この家での父親の地位の低さが伺える。

唯一、自分をおまけとしてだけでなく歓迎してくれるセナの頭を撫でるが、そのセナも悠が靴を脱いで、出迎えの弟妹達を連れ離れ

て行くと、セナも豊をおいてさっさと行ってしまつ。
情けない顔でおゝいと言いながら子供達の後を追ってリビングに
入る。

そこで自分に一番似ている長男に抱きついていてる妻をみつけ、慌
てて駆け寄ると引きはがす。

「悠はだめだ！」

抱きつくなら私にしなさい！」

「イヤよ。あなたとはケンカ中だもの。」

子供達は相変わらずの父の反応にしらーとした目を向けている。

実はケンカをするたびに、父にヤキモチをやかせるためにわざと
父の目の前で血のつながらない長男に奈緒が抱きついてるのは父
だけが知らない・・・

ただ、この言い合いが始まると、ケンカは終息に向かっていてと
いうサインなので、放っておくことが良いことは全員が心得ている。

子供達の前で堂々と妻にベタベタくっつく父に呆れつつ、年中こ
んな妻にべた惚れの父を見ているから、自分も誰かかと思うのかも
しれないと父には聞かせられないがそれぞれに胸の内では思っていた。

結局のところ、悠が包みを一馬に渡し、いつも渉に言うように帰
宅したら手洗いを実行して、すっかりパーティーの準備が整ったり
リビングに戻ると、豊は何とか奈緒の許しを得たようで、手に持って
いた包みを持って着替えに行くと言う奈緒の後ろを着いて出て行っ
た。

「メリークリスマス！」

やっと全員が揃い、元気よくアップルサイダーで乾杯をする。

悠が帰宅時に持っていた包みは、セナ用のクリスマスケーキで、後で皆がケーキを食べる時に一緒に食べるのだと言う。

それぞれに料理と会話を楽しみ、明日の朝、自分からのプレゼントを開ける家族の笑顔を思い浮かべながらクリスマススイブの夜は更けていく。

Christmas Eve 2 (後書き)

夫婦喧嘩は犬も食わない。

作中には出てきませんでしたが、ケンカの原因は子供達の元を訪れる時間でした。

できるだけ妻を独占したい夫がディナー後に子供達の元にプレゼントを届けに行くと言ったのを妻は午後から行ってディナーの準備をしたいと言ってケンカしたんです。。。

筆力が無く、特別なことは何ありませんがクリスマスイブの新堂家でした。

連続更新予定、残るところあと1日です。。。

Merry Christmas!!

クリスマスの朝。

良く晴れた空の元、新堂家のリビングには靴下を手にした子ども達がいた。

「ぼくのがいちばん!」

自分の体より大きくなった靴下を抱え中身を取り出している。

昨夜、兄弟達はそれぞれに隙を見計らって他の兄弟の靴下に自分のプレゼントを忍ばせ、今日開けるときの顔を想像していた。

両親と年長者達はプレゼントに喜ぶ姿に微笑みを浮かべる。

「プレゼントを開けるのはいいが、朝食の後にしよう。」

いつもと同じ悠の声に、明るい返事が加わり、少しだけ特別な日が始まった。

おわり

Merry Christmas!! (後書き)

とっても短い終章になってしまいました。。。

書きたかったエピソードはまだまだあるのですが、
それを書くところを過ぎてしまうので
機会があれば書きたいと思っています。

最後までお付き合いありがとうございました。

それぞれの年末年始 その1 (前書き)

渉、希、翼、慎の年末年始のひとり言です。

それぞれの年末年始 その1

渉の場合

きょうは12がつ31にち。

おおみそか。

パパのおてつだいでまどをきれいにして、かいものについて、そのあと、セナとおひるね。

よるはあきちゃんみんなにおそばとつごんをつくってくれた。

みんなはおきているけどぼくはねちゃった。

セナのおはようでおきると、のんちゃんがいた。
あさからのんちゃんといっしょ。
きょうはたのしくなりそう。

一番平和な子です。

希の場合

まじー！

ひどい！
恥ずかしい！！！！

とりあえず、渉の部屋に逃げ込んだけど、朝どうしよう・・・

渉より早く起きて様子を見ようと思ったのに、渉の方が先に起きちゃった。

新年の朝に最初に見るのが渉の笑顔なのもいいかも。

何が起きたのか・・・

翼の場合

逃げられた・・・

俺が逃げ込もうと思ってたのに・・・

酔っぱらいめ、朝には絶対にとっちめてやる！

俺、一人で寝てたはずなんだけど・・・
なんでいるんだ？

原因は酔っぱらいのようです。

それにしても、誰がいたんでしょう？

慎の場合

お酒って・・・

翼も希も先に逃げるし・・・

一番年下もつらいよ・・・

初日の出を一人で見る。

やっぱりこれが無いと一年が始まらないよ。

マイペースなコ。

それぞれの年末年始 その2 (前書き)

残りの潤、一馬、玲、悠のひとり言です。

それぞれの年末年始 その2

潤の場合

びっくりした・・・

酒を飲むとあんなふうになるんだ。

ん？

ちゃんと自分の部屋で寝たと思うんだけど・・・

なんで俺はここにいるんだ？

何か起こった様です。

一馬の場合

人が目を離した際に・・・

朝の準備は俺がしてやろう。

さあ、雑煮の準備もできたから、そろそろ全員起こすか。

新年でも普段と変わらない朝を迎えた様です。

玲の場合

まったく、どうしよう。

この惨状を片付けるのは俺しかない。

今日は兄さんも戦力になりそうにないし・・・

まだ寝ています。

悠の場合

子供達が間違えてお酒を飲んでしまった・・・

保護者としては今後の対策を考えねばいけない。

ここ数年、かわいい弟達には逃げられてばかりだ。
かわいくない大きいのは相変わらずなのに・・・

涉を起こしに行ったら希が一緒に寝ていた。

可愛いもの同士だとよりいっそうかわいいな。

弟達の寝顔はいつまでたってもかわいいものだが、やはり、小さい方がかわいいな。

もう少し、寝かせておいてやろう。

パパであり、保護者な悠。

ちよつと性格違つかも？

それぞれの年末年始 その2（後書き）

年少者達、どうやらお酒を飲んでしまいいろいろ失敗したようです。希がした恥ずかしいことはなんだったのでしょうか。

それと翼と一緒に寝ていた人は？

ネタバレをしないように書いたので、話が進んだら全て分かるように書きたいです。

幸せの記憶（前書き）

久しぶりの投稿です。

現在、本編を鋭意（？）執筆中ですが、時間がかかるためちょっと肩ならしもかねて番外編から手をつけてみることにしました。

幸せの記憶

まだ潤が産まれて間もない頃が俺の中にある一番古い兄の記憶だ。小学校に上がる前で、弟が産まれたことが嬉しかったが、両親の関心をさらった潤に少しだけ嫉妬していたのを覚えている。

確かそれはこどもの日で、母がお祝いのちらし寿司を作ってくれ、ちよつど食べる準備ができた頃だったと思う。

両親は朝からなぜかそわそわと緊張した様子で、俺が不満気にしていることなど気づきもしていなかった。

ドアベルが鳴る音に、そわそわしていた母がびくりと反応し、少し戸惑つてからゆつくりと玄関に向かう。

玄関から聞こえる声と人の入って来る気配に、少しだけ興奮していたのも覚えている。

リビングのドアから入って来たのは、俺より小さな子どもで、茶色の髪と大きな茶色の瞳で珍しそうにきよろきよろしていた。

「にーちゃ、おとはは？」

舌つたらずに話す年少の少年に驚きながら、見た先には少年をそのまま大きくしたような男が母の隣に立っていた。

「玲、それはお前の弟じゃないよ。」

「おととちがう？」

キラキラさせていた目が一気に潤んで行くのを呆然と見つめながら、俺はこの少年とそれを見下ろす男から目が離せなかった。

次の瞬間、破裂するように大きな声で泣き出した少年とその声に驚いて泣き出した潤の泣き声の二重奏に俺は耳を塞いだ。

男は大泣きしている少年を抱き上げ、手慣れた様子であやしてい

る。少年も、男の首にしがみつき、何がそんなに哀しいのか大きな声で泣いている。

母は泣き出した潤を抱き上げてあやし、父は2人の様子をただ眺めていた。

「玲、お前が大きな声を出すから潤が泣いてしまったらどう？」

「そうだ！」

それに潤はお前の弟じゃなくて俺の弟だ！」

2人を見上げてびしつと言った俺に、男は笑みを浮かべる。

俺にはそれがバカにしているように見えて、一層不機嫌になった。

グシグシと泣いていた少年が男の首元から顔を上げ、俺を見下ろす。

泣いてぐしゃぐしゃになった顔だが、それでもかわいいと思ってしまった自分が少しだけ恥ずかしかった。

「おとと？」

首を傾げて俺に言う少年に、俺の弟だと宣言し直した俺に、男は苦笑を浮かべ、腕に抱いていた少年を下ろすと一緒にしゃがみ込み俺に視線を合わせた。

「一馬、玲はお前の弟かって聞きたいだけで、もう自分の弟だとは思っていないよ。」

思いがけず言われた言葉と、男の優しい笑みに恥ずかしくなり顔を背けると、ぺたぺたと足音がして、小さな手が俺の顔に触れた。

「かずま？」

「ぼくあき。」

たどたどしい自己紹介に、応える俺に男が微笑みかけ、少年から手を離すと、潤をあやしていた両親へと近づき、母に抱かれた潤ん

を覗き込む。

泣いていたはずの潤が男の顔を見ると泣き止み、きゃっきゃと声を上げ笑い出したことにその時の俺は気づくこともなく、目の前の可愛い存在に釘付けだった。

気づいた時には、潤は男に抱かれ、その隣で母が嬉しそうに微笑んでいた。

そして、嬉しそうな母を見つめる父も嬉しそうで、俺も嬉しくなった。

「悠、どう？」

「あなたの新しい弟は？」

母の言葉に驚いた俺をめざとく見つけると、男は微笑んだ。

「一馬が産まれた時とそっくりです。」

残念ながら私にはあまり似ていませんがね。」

あわてて玲の手を引いて、母の元に駆け寄った俺に母は言った。

「一馬、お前は覚えていないかもしれないけれど、お前のお兄さんの悠よ。」

その後のことは記憶の中にあまり残っていない。

だが、その後、かなりの頻度で兄と会う様になり、必然的にくっついてくる玲と先を争って兄に遊んでもらおうとしたことは何となく覚えている。

実際、事情がちゃんと理解できる様になるまでは、なぜ兄と一緒に住んでいないのか、そして、玲は俺の弟ではないのかわからず、何度もダダをこねては母が兄を呼んでくれた。

俺たちと一緒にいなくても、兄は兄で玲達と幸せに過ごしていることに少しの安堵と寂しさを覚えていた。

「カズ兄」

早くしないとゴハンが冷めてしまつよ。」

昔のことを思い出していた俺の意識を、現実に呼び戻す声は潤とは数日違いで産まれた翼だ。

その後ろにはあの日と同じ様に優しい目をした兄と、相変わらずかわいい玲、潤に懐がいるのだろう。

ここ数年、玲はずいぶんと生意気に俺に対抗意識を向ける様になり、子どもの頃のようにはいられないが、あいかわらず俺にとって一番かわいい弟分だ。

あれから両親が亡くなり、兄に引き取られたが、その時はこんなに温かい家族になれるとは思っていなかった。

でも、あの日初めての兄の記憶そのままに、兄は弟達に接し、あの日の玲にした様に渉に接している。

声に出して言うことは無いが、あれからずっと変わらず、兄は俺の自慢の兄で、弟達は可愛い弟だ。

あの日のように、両親と兄とが揃うことはもう無いが、こどもの日になると初めて兄と玲と会ったことを15年経った今でも思い出す。

あの日、温かく笑っていた両親と一緒に。

それはとても幸せな優しい記憶。

幸せの記憶（後書き）

ちよっとしんみりした話になってしまいました。一馬にとっての兄弟、家族とはどんなものなのか少しでも書けていたらと思います。そし実は、一馬にとって一番可愛い弟は玲なんです。成長するにつれ、ライバル意識も大きくなりますが、初めてできた弟なので。。。そして、普段は年少者達をかわいがり、一馬と玲には厳しい悠も実は2人が可愛くて仕方が無いのです。。。。

微妙に設定でていますが、本編で上手く設定が描けて行けたらと思います。

一応、プチ設定としては、呼ばれてリビングに現れた一馬が最初に見るのは翼と潤の柏餅の取り合いで、高校生にもなつてと一馬の雷が落ちるのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6619p/>

家族ゲーム 番外編

2011年5月16日12時57分発行